

せる白居易との關係、及び、詩中で何度も用いられる杜甫の詩を典據とする表現から窺われる杜甫との關係をも指摘すべきではないだろうか。

いささかあら採的な批評に終始してしまつたが、本書全を通じて展開されている、作品をよく読み込んだ詳細な考察を読み進めていくと、筆者が常に蘇軾の作品と「理」との關わりに、強い問題意識を持つていることが感じられる。それは杭州通判期のように、詩の表面で「理」に言及することが少ない時期を論じる部分においても、底流として存在するものであろう。蘇軾のように、詩においても議論や抽象的な概念を展開することの多い詩人の作品を読む場合、「理」との關わりから考察を進めることは、一つの有意義な方法であらうし、本書でも十分な成果を上げていると思われる。讀みながら蘇軾の「理」の捉え方について、多くのことを學ばせていただいた。筆者が本書では取り上げられなかった黃州以後の蘇軾の作品についても、同様の視點をもとにさらに考察を進められ、その成果を公表してくださいることを期待したい。

(湯淺陽子)

書 評

丸尾常喜『魯迅「人」「鬼」の葛藤』

東京 岩波書店 一九九三年十二月 三三五頁

一

魯迅の作品には紹興の土のにおいがしみついている。それも、數千年にわたる歴史のなかで醸し出されたかび臭いにおいである。紹興には夏王朝の始祖といわれる禹を祭つた廟があり、春秋時代には越王勾踐がここに國都を定めている。そこは、かつて江南地方をとりしぎった樞要の地の一つであつて、古來、多くの人材を輩出した（人文の淵藪）でもあつた。

魯迅はそうした古都に舊家の嫡子として生まれ、そのころはまだ、高級官吏への登龍門であつた科擧への應試を目的とする受験勉強に勵んだ。だが、當時はすでに政權の屋臺骨が崩れかけていた清朝の末期であり、彼もそのような時代の風潮のもとで、新式の學校に修學の道を求め、新しい學問をめざして日本へ留學することになる。

その結果、魯迅は中國の傳統社會に根付いた制度や文化に強い疑問を抱くようになるが、しかし、そのことは魯迅と舊文化との隔絶を意味したわけではない。後には中國の古典研究を專業として大學の講壇に立ち、多くの優れた業績を公にしていることからあきらかなように、彼はその五十五年の生涯を通じて、かび臭い土のにおいて意識的に付き合う道を選んでいる。

丸尾氏の『魯迅』は、この紹興の土のにおいて、これまでの〈魯迅學〉の結晶を總動員してぶつけ、それに「歴史學、思想史學、宗教學、民俗學などの研究成果」をふまえながら魯迅文學の意義をあきらめ、そこから中國の社會や文化を読みとるキーを獲得しようとする勞作であって、著書のいたるところに、舊説をおびやかすような假説が提示されている。

もちろん、假説は作者の靈感によって、ある瞬間に忽然とひらめくものではない。丸尾氏は本書以前に、魯迅が中國小説史の入門書として記した『中國小説的歴史的變遷』に詳細な譯注を施し、それを『中國小説の歴史的變遷』と

題して凱風社から一九八七年に出版した。また、一九八五年に刊行された學研社版『魯迅全集』では、『呐喊』や『彷徨』に收録された魯迅小説の翻譯を丸山昇氏とともに擔當して、それにも必要な注解と解題を加えている。そして同年、魯迅の生涯にわたる概説書として定評のある『魯迅花のため腐草となる』を集英社から公刊している。

著者は、魯迅研究に關するこうした地味な作業を繰り返しながら、他方では魯迅についての數多くの考察を次々に論文として發表、それらを系統的にまとめた『魯迅と傳統に關する基礎的考察』を、學位請求論文として一九九一年に東京大學へ提出している。本書のもとになっているのは、この學位論文である。従って、ここに提示された假説には、その前提となる綿密な考證があり、それは文字どおり、微に入り細を穿ったものである。

『第一章「人」と「鬼」——紹興覆盆橋周氏とその周邊』では、魯迅の家系圖を今日判明する限りの資料を使って詳細に圖示し、中國の傳統社會で家系を維持することの意味と「鬼」との關係を、葬禮に關する民俗的な描寫とともに

綿密に再現しようと試みる（一「人」「鬼」の関係）。また、少年時代の魯迅が親しんだ演劇の中から、『紹興目連戲』についてその發生から當時の上演風景にまでふれ、それが彼の小説世界と密接なかかわりがあることを、王瑤氏や夏濟安氏の説を手がかりとして示唆する（二「人」「鬼」の浸透）。

丸尾氏によれば、「人」は「陽間」、「鬼」は「陰間」における靈魂の存在形式であり、「陰間」での「鬼」の生活は、彼らの子孫が「陽間」より送りとどける食物・衣服（紙衣）・金銭などによってささえられている。そして祖先の靈（鬼）を祭る者は男子を後嗣とする一族でなければならぬから、後嗣を缺き、祭祀をうけることのできない「鬼」は、「陰間」で悲惨な「生活」を送ることになる。

魯迅が少時に親しんだ『紹興目連戲』は、「佛陀のもとで修行し、神通力を得た目連」が、餓鬼道に墮ちた母を、盂蘭盆の供養によって救済する演劇であるが、丸尾氏はまず、さまざまな史料や研究書を駆使して、この『紹興目連戲』についての詳密な考證を行う。これによって、讀者は少年

魯迅の紹興における文化生活（傳統社會）の一部を、いながらにして追體驗できるといふ仕掛けである。

二

『第二章 隔絶と寂寞——孔乙己の後影』は、科擧での登第を夢見ながら、結果的にはその制度の犠牲となった『孔乙己』の論であり、『第四章 祝福と救済——祥林嫂の死』は、舊時の下層社會で寡婦となつて悲惨な生涯を終えた祥林嫂を主人公とする『祝福』の作品論である。兩作品ともに、中國の傳統社會が生み出した特有の没落知識人ならびに寡婦を作品の主人公とするが、彼らの悲劇は、丸尾氏が第一章で執拗に論じた「鬼」との関係で讀み釋かれる。

孔乙己は、科擧の受験に失敗して憤死した鬼を意味する『目連戲』の「科場鬼」、祥林嫂は、再婚したために、冥界で魂の安樂を得られなくなつたと迷信する寡婦の生涯である。いずれの作品も、作者の「主要な意圖は、苦境にある人間にたいする一般社會の「涼薄」を描くところにあつた」と丸尾氏はいふ。「涼薄」は、「無關心、冷淡、薄情な

どの意味を持つ語」である。

二作品にたいするこのような評價自體は決して新しいものではない。同様の見解としては、たとえば、片山智行氏が『孔乙己』について、「他人の苦しみを苦しみと感じない民衆の存在」（『魯迅のリアリズム』「孔子」と「阿Q」の死闘、一九八五年、三一書房）といい、『祝福』に關しても、「姑からも、讀書人階級の雇主からも、廻りの民衆からさえも、意識的無意識的にしいたげられた祥林嫂の悲劇」（同上）と記している。表現は異なっても、作品分析の視點は基本的に一致しているといつていいだろう。

ここでの丸尾氏の分析の特色は、それを「鬼」との關連で考證したことである。そのために氏は、『論語』『荀子』『莊子』『周易』『禮記』『中庸』『左傳』『史記』『弘明集』『朱子語類』『五朝名臣言行錄』『二程遺書』『書儀』『說苑』『劉宣人作感應篇集注序』『日知錄』『近思錄』『破邪詳辯』『聊齋志異』といった中國の典籍を縱横に引用し、さらに、内外の魯迅研究文獻や中國文化を論じた數多くの研究書を援用しながら、それをさまざまな角度から説き來たり説き

去ろうとする。

また、それぞれの作品に現れた人物や用語についても、精密な注釋が施される。たとえば、孔乙己が書物を盗んで折檻されたことを揶揄されたとき、彼は「君子固より窮す」と口走ったが、その言葉の解釋は出典となつた『論語』との關連で考察される。すなわち、「君子固窮」の解釋には、何晏による舊注と朱子による新注ならびに新注の引く程子の説があること、そしてそれが使用された『史記』『孔子世家』のエピソードや『孟子』での解釋が引用され、最後に、孔乙己が「文語文で組立てられた彼の觀念世界でこそ、自由」であることを指摘し、次のように結論する。

民衆のなかで、孔乙己の頭腦にたくわえられている知識が何の權威ももっていないこと、このことがまずスタンドで立ち飲みせざるをえない孔乙己の「寂寞」をつくっている。しかし、このことは孔乙己個人の責任というにはあまりに大きな原因に發しているといわなければならない。なぜならば、彼の「寂寞」は、彼個人の「寂寞」というより、「聖人」孔子の「寂寞」と

重なるある大きな「寂寞」にほかならないからである。丸尾氏によれば、魯迅は、「立ち飲み客でありながら長衣を着ているたった一人の人間」孔乙己を描くことによって、「中國の傳統文化、傳統思想のかかえる重大な困難を、的確に描寫している」のであった。

これは、一例にすぎない。丸尾氏の『魯迅』は、全體がこのように膨大な注釋を加えることによって成り立っており、それは本書のきわだった特徴であるとともに、後述するように、魯迅研究上の別な問題をもはらんでいるのである。

三

先にもふれたように、丸尾氏は本書においていくつかの假説を提示している。その一つは阿Q＝阿鬼の説であり、第三章がそれにあてられている。本章は「主人公の名前についでての考證」であり、「その考證によって「阿Q正傳」という作品の意圖、その創作過程、作品の構成などについて一つのまとまった見解を提出しようとするのが目的」であ

るとされる。「特に「阿Q」正式には「阿Quei」という人物の名が、「阿鬼」であることを明らかに」することに重點がおかれている。

周知のように、『阿Q正傳』の「第一章 序」は、コミカルなタッチで、作者自身が題名の由來を自問自答する四つの考證部分から成り立っている。それらは一見、魯迅が形象する作品の主人公阿Qについての、あまり意味のないおしゃべりのように讀まれることが多かった。だが、丸尾氏は、魯迅の歴史小説『理水』のなかで、「禹」が「禹」であるという描寫のあることを指摘した後、魯迅の師であった文字學者の章炳麟に、「禹」が「鬼」であるという説のあることを紹介、「禹＝禹＝鬼という式」を組み立てた。

魯迅自身は、阿QueiのQueiに相當する漢字を、「貴」かも知れず、「桂」かも知れないが、しよせんは不明だと述べるにとどまったが、丸尾氏は現代漢語で「鬼」の發音がそれらに通ずることもあって、「阿Q＝阿鬼の説」を提起する。しかも、その過程でそれを論證する手續きとして、魯迅と胡適およびその弟子顧頡剛との間に交わされた論争

や軌轢にも論及、「阿Q」阿鬼の説」が補強されている。

丸尾氏の考證は、『阿Q正傳』の舞臺となつた「未莊」にも及び、「畏」と「鬼」が同類であるという章炳麟や沈兼之の説を引用した上で、「未」は「畏」の韻字であるから、「未莊」とは「畏莊」のことであり、「未莊」は「鬼莊」、つまり「幽霊の村」と同義であつたと結論するのである。

以上のほかにも、本章では、さらにいくつかの考證が行われている。魯迅の短編小説『藥』の「清明節の場面」と『目連戲』「曹氏清明」との場の類似は、前者が後者の枠組みを借りて換骨奪胎した一種のパロディである可能性」や、『阿Q正傳』で、腹をすかせた阿Qが尼寺の靜修庵にしのびこみ、大根を盗んで逃げる場面を、『目連戲』と對比しつつ、前者が後者のパロディだとみなされたりすること等々である。

丸尾氏の引用は古今東西にわたり、博引旁證、一點の疑問も許さないほどに嚴密である。また、單に考證のみならず、「孔乙己」「阿Q」「祥林嫂」という、舊制度のもとで悲惨な生涯を送つた主人公をテーマとする作品の分析に集

約する形で、實際には魯迅の作品全般にわたる魯迅論が展開されている。創作のみならず、評論活動をも含めた魯迅の營爲については、きわめて的確な評價がくだされて、そこには、これまで魯迅ひとすじに研究を續けてこられた丸尾氏の造詣が十二分に示されている。

ただし、丸尾氏の『魯迅』にたいして、筆者はまったく疑問がないわけではない。僭越ではあるが、次にはそのことを二、三指摘しておきたい。

四

丸尾氏の『魯迅』には『人』『鬼』の葛藤」という副題がついている。ここでの「人」は、『序章』『人』『人の國』で『破惡聲論』を引きながら次のように定義されている。

魯迅が「搜し」あてたのは、強大なヨーロッパ文化をその根底でささえ、今自らの「偏向」を矯めつつある「人」である。國民がそれぞれに「人」となる、「人」の共同によつて「人の國」をつくる、中國に新しい生命を生み出す方途はこのほかにない、と彼は考えた。

魯迅に醫學を捨て文學に轉じさせたのは、このような「立人」の理想であつた。

この「立人」の理想については、中國でもすでに幾つかの論文が發表されており、本書の注にもそのことは記されている。日本留學時代に、魯迅が友人と論じた「國民性の改造」も、おそらくはそのような方向で考えられたものであろう。そして、丸尾氏によれば、そのような「人」に對立する概念が「鬼」であり、この「鬼」と「人」との葛藤が魯迅の文學的營爲だということになる。

國民がそれぞれ「人」となり、「人の國」をつくる。魯迅の一生をつらぬいたこのテーマが、魯迅の小説世界に「人」の缺如態としてのさまざまな人間たちの姿——「鬼」の影像を映し出すことになった。「孔乙己も阿Qも祥林嫂も」そのような「鬼」である、というのが本書で明らかにしようとしたところみてきたことである。すなわち魯迅自身が「病態社會の不幸な人びと」（「私はどのようにして小説を書くようになったか」、一九三三）と呼んだ人びとを、「鬼」の影像という視點から考えて

書評

みようとしたのであつた。『終章「人」「鬼」の葛藤』

右のような目的意識をもつて、丸尾氏は古今内外にわたる膨大な文獻を驅使し、何よりも阿Qが阿鬼であることを證明しようとした。だが、そのこと自體は必ずしも成功したとはいえない。なぜなら、本書が注で引く王瑤氏がいみじくも指摘したように、「魯迅が小説を書くさいに謎をしかけて後世の者に考證させるようなことをするはずがない」と評者には思えるからである。

たしかに、魯迅は「文字遊び」の好きな人であつた。だが、丸尾氏の考證されるような「禹＝禺＝鬼という式」の組み立てを必要とするような意識をもつて魯迅が小説を書いた、とはとうてい考えられず、さらに、「畏」と「鬼」が同類であるという章炳麟や沈兼之の説から、「未莊」は「畏莊」のことであり、「未莊」は「鬼莊」、つまり「幽霊の村」と同義であることを小説に假託したとは思えない。極論すれば、これは丸尾氏の文字遊びなのではないか、という疑問が評者にはある。

阿Qに關していえば、魯迅は文中でせいぜい「阿桂」

と「阿貴」をあてて、さももつともらしく考證して見せているだけであり、そこにこそ魯迅の文章がもつ諧謔の妙が見られるのであって、同文中の「仿佛思想裏有鬼似的」の「鬼」はまったく別な文脈で使用されているにすぎない。魯迅に關連する文章のなから、あらゆる「鬼」を動員して、「阿Q」「阿鬼の説」に收斂させるのは、やや強引であるばかりではなく、その言葉が全體の文脈に占める効果を抹殺する、非文學的な深讀みになるのではなからうか。

丸尾魯迅の本領は、そうした文字あわせにあるのではなく、これまでの研究であまり重視されてこなかった、舊中國における「鬼」の世界を、魯迅のいう「國民性」形成との關連で明らかにし、それを「鬼」「人」の葛藤という主題にしぼりこんだ、氏の深い作品の讀みにあるのであり、從來の魯迅研究の成果を、あたかも一堂に會させて示すごとき着實な研究の姿勢にあるのであって、それこそが、本書の讀者に對する最大の貢獻と功績である、と評者は考えている。

五

書物を盗んで折檻された孔乙己が、そのことを酒場でからかわれたとき、「君子固より窮す」と口走ったこと、それにたいする丸尾氏の解釋が、典據となった『論語』とそれに關する新舊の注、『孟子』『史記』にまで及んでいたことにふれ、それは本書の特徴であるとともに、ある種の問題をはらんでいる、と評者は記した。

ここで「特徴」というのは、關連するすべての文獻を獵涉することによって綿密な解釋を施すことであり、それは丸尾氏自身が『あとがき』で認めておられるように、「注疏の學」である。しかし、それにたいして、評者は丸尾氏の一語一句もゆるがせにしない考證の姿勢に感動をおぼえながらも、はたしてその考證がいつの場合も必要かつ妥當であるのかどうかという疑問が生じるのである。

「君子固窮」は、たしかに『論語』を出典とするが、それは、魯迅にとっては日常的に使いなれた成語として使用されているのであって、そのような成語の意味を程子や朱

子、何晏の解釋にまで遡及して検討する意味があるのかどうか。そのような方法は、注釋が注釋を呼び、考證が次の考證を無限に引き出した『十三經注疏』のひそみにならう「注疏の學」に通ずるものであつて、時には魯迅の創作意圖から乖離する危険性さえはらんでいるのではなからうか。ただし、それにもかかわらず、そうした複雑な手續を経て導き出された丸尾氏の結論は、『孔乙己』に描かれた知識人と民衆との隔絶を示す、みごとな論斷で締めくくられている。つまり、丸尾氏には、長年にわたる魯迅研究によつて得られたゆるぎない結論が初めからあり、本書で示された考證の相當部分は、むしろそうした結論を學術的に補強する材料として組み立てられているのである。それらの多くは、民俗や宗教とのかかわりで、中國の傳統社會や文化をみごとに解きあかして、「中國傳統社會は魯迅の小説によつてどのようにとらえられたか、を明らかにす

る」本書の意圖を充分に實現している。

失禮を顧みず、率直な印象を述べれば、本書には學位論文としての形式を整えるための無理な考證がかなり混入していると思われる。それは、魯迅研究にとつてけつして有益な作業とは思えない。特に第二章と第四章にはそれが顯著で、この二章は、『阿Q正傳』を中心に論じた第三章とは、あきらかに質的な落差の目立つ内容である。

本書のもとになった學位請求論文『魯迅と傳統に關する基礎的考察』を評者は見ていないので、それと對比して論ずることはできないが、一般の魯迅讀者をも對象としているはずの本書では、あまり重要でない考證部分は思い切つて割愛していただいた方がよかつたのではないだろうか。そのようにしてこそ、本書の眞價は、より正確に讀者に傳わるはずだ、というのが評者の感想である。

(神戸大學 山田敬三)